

敦煌禪籍の研究状況とその問題点

田 中 良 昭

- I. 敦煌禪籍とその内容
- II. 禪宗燈史の成立と展開
- III. 初期の禪語録
- IV. その他の敦煌禪籍

I 敦煌禪籍とその内容

中国甘肅省の西辺に位置し、古来中原と西域を結ぶ交通の要衝であった敦煌から、今世紀初頭、膨大な数の古文書類が出現した。この敦煌から出現した古文書類を総称して、一般に敦煌遺書、敦煌文書、敦煌文献等と呼んでいる。

その数はおよそ40,000点といわれ、その大部分は漢文文献であり、しかもその内の87.5%が仏教文献である。これらの敦煌文献の成立は、およそ5世紀から11世紀初めまでで、11世紀初頭に、中国人又は西夏人の手によって、莫高窟千仏洞の一石室、すなわち現在その存在が知られている492の石窟の内、藏経洞と呼ばれる第17窟に封印され、その後約900年間、その存在がまったく知られずに、封印当時の状態のまま石窟内に眠っていたのである。これが再び人びとの耳目にさらされ、世界の学会の注目を集めるようになったのは、極めて偶然の出来事であった。当時石室の管理人であった道士の王円籙氏が、光緒26年(1900)5月26日の朝、突然天に響くような音と共に壁面にひびが入り、この裂け目から煙が奥に吸い込まれていく光景を見て、その壁面を穿つていくと、別の新たな洞窟が出現し、その中に、大中5年(851)の紀年のある石碑と、膨大な数の古文書類のあることがわかったのである。これが敦煌文献発見の経緯である。

この偶然の発見は、当時西域探険に関心を抱いていた各国探険家の知るところ

となり、1907年5月にオーレル・スタイン氏が、1908年2月にポール・ペリオ氏が、王道士よりその一部を購入して、それぞれロンドンの大英博物館（現大英図書館）とパリの国立図書館に移送した。こうした古文書類の国外流出を知った清朝政府は、急ぎ敦煌に残存する文物の保全を命じ、1910年、それらを北京の京師図書館（現国立北京図書館）に移した。しかし、それでも尚敦煌には数多くの古文書類が隠されていたようであり、1912年2月には、日本から大谷探險隊員として派遣された橘瑞超、吉川小一郎両氏によって、その一部が購入されて京都へ送られ、更にソ聯の仏教学者オルデンプルク氏が、1914年から1915年にかけて購入した古文書類が、レニングラードの東洋学研究所へ送られた。

こうした探險家による購入や移送の間に、流出したり散逸したものもあり、これらが後に中国や日本の図書館や個人の手に戻るところとなった。近年、北京大学出版社から刊行された『敦煌吐魯番文献研究論集』3輯所収の敦煌県博物館による「敦煌県博物館蔵敦煌遺書目録」¹⁾に記載された敦煌文献も、この種のものである。すなわちその中には、かつて北京大学教授であった向達氏が、その論文「西征小記」²⁾において、敦煌在住の任子宜氏の所蔵として報じ、一昨年秋、北京大学において開催された中日仏教学術会議に際して、楊曾文氏が「中日両国の敦煌禅籍研究」³⁾と題して報告された、現在敦煌県博物館所蔵の『六祖壇経』『菩提達摩南宗定是非論』等4種の初期禅宗に関する重要資料を連写した極めて価値の高い写本⁴⁾も含まれており、その内容の一日も早い公開が、世界の学会から期待されているのである。

こうして世界各地に持ち出された敦煌文献は、各コレクション毎に、保存、整理、修復が行われ、分類作業や目録の作成、マイクロフィルム撮影やその相互交換等が実施され、それは現在も尚継続されている。各コレクションの現状については、かつて日本で出版された〈講座敦煌1〉の榎一雄氏編『敦煌の自然と現状』の中で、梅村坦氏が「敦煌探險・研究史」⁵⁾と題する詳細な報告をされているのでそれに譲り、ソ聯のオルデンプルク・コレクション以外の敦煌文献の検索には、1962年、北京商務印書館より王重民氏によって刊行された『敦煌遺書総目索引』⁶⁾が、極めて有益であることを付記するにとどめたい。

敦煌文献全般に関する概要を述べたので、次に本小論で実際に取扱う敦煌禅宗文献、すなわち敦煌禅籍について、その内容を概観することにした。敦煌禅籍は、多方面にわたる敦煌文献の中では、仏教文献の一部をなし、それ等を内容の

上から大別すれば、

- (1) 禪宗の歴史を述べた伝燈の歴史書である燈史類
- (2) 禪僧による説法や問答、或いは問答形式による禪法の説示等を記録した語録類
- (3) 悟りの境地や修道の悦び、或いは修行の用心や心構え等を韻文でうたいあげた偈頌類
- (4) 禪僧による經典の注釈や要抄、或いは經典の形式を借りて自らの思想や禪法を開示した偽經類

等に分けることが出来る。⁷⁾これらはいずれも漢文文献であるが、今一つ重要なものに、8世紀末より9世紀前半にかけて敦煌が吐蕃に支配された際に、中国で成立した禪宗文献がチベット語訳されたり、中国禪がチベットに流入してチベット文の禪宗文献が作成されたりして出現したチベット語の禪籍がある。⁸⁾広義の敦煌禪籍には当然これらを含むのであるが、本小論では、漢文文献4種の内、(4)の經典の注抄と偽經類、最後に挙げたチベット語文献によるチベットの禪等については、広く中国仏教全体の問題として岡部和雄教授にその取扱いをゆだね、ここでは敦煌禪籍の内、(1)燈史類、(2)語録類、(3)偈頌類について、それぞれの研究状況の概要とその問題点について述べることにしたい。

Ⅱ 禪宗燈史の成立と展開

唐代を中心として成立し発展した中国禪宗の歴史的展開、すなわち初期の中国禪宗史を研究する第一資料としては、唐の道宣による『続高僧伝』（645、667まで増補）と、その続篇である北宋の贊寧による『宋高僧伝』（988）を挙げねばならない。⁹⁾これらのいわゆる高僧伝類は、その名の示す如く各時代に生きた高僧の伝記を編輯することがその主目的であり、それが直ちに仏教史や禪宗史を述べようとしたものではない。また従来禪宗の歴史を研究する場合に重んじられたものに、道原の手になる『景德伝燈録』¹⁰⁾(1004)がある。これは確かに禪宗内で成立した禪宗の歴史書には違いないが、その主眼とするところは、正法が伝持された師資の機縁とその語句を集めることにあり、必ずしも客観的な禪宗の歴史を述べようとしたものではない。しかもその成立が11世紀初頭であることを考慮すれば、唐代に成立した禪宗の生々しい実態を知るには、いかにも後代の資料といわざるを得ない。かくしてかねてから、『続高僧伝』の成立した7世紀中期から、

『宋高僧伝』の成立した10世紀終りに至るおよそ350年間を埋める禅宗の直接資料の出現が待たれていたのであるが、その期待に答えて出現したものこそ、まさしく敦煌禅籍であったのである。

『続高僧伝』は、その成立年代からして、初期禅宗に属する人びとの中では、達摩と慧可を中心とし、それに僧璨を含めた所謂楞伽宗の人たちと、著者の道宣と同時代の人である道信の伝を後に増補するに過ぎず、その道信伝には、その門人として弘忍の名を挙げてはいるが、僧璨と道信の関係については一言も触れていない。すなわち達摩—慧可—僧璨の系譜と、道信—弘忍の系譜は可能であっても、この二つの系譜を結びつけることは出来なかったのである。

ところが、弘忍の十大弟子の一人で、達摩、慧可の活躍以後、再び嵩洛の地に禅を再興した法如の行状を記した『唐中岳沙門釈法如禅師行状』¹¹⁾(689以後)によって、先の二つの系譜の結合がなされ、僧璨と道信を結ぶと共に、弘忍の法を嗣いだ者として法如を立てる達摩から法如に至る六代の伝燈系譜が、初めて確立されたのである。そしてこの伝燈系譜をふまえつつ、更に神秀に至る七代の伝燈系譜を主張した最初の燈史が、敦煌禅籍(以下*印にて表示)の一つである*『伝法宝紀』¹²⁾(713頃)である。

この書の撰者である杜朮とは、東都大福先寺の朮法師のことで、中岳少林寺で達摩の禅の再興を果した法如を慕った普寂や義福を、法如に推譲した人物とみられている。しかし法如の入滅により、普寂や義福は神秀の門に入り、これらの人びとによって、北地両京を中心に朝廷の帰依を得て発展するのが北宗禅と呼ばれるものであるが、『伝法宝紀』は、この普寂や義福の依頼によって書かれた法如を顕彰するための著作とみられている。この書は、後に発展する禅宗燈史の嚆矢として極めて重要な意義を持つものであり、達摩から慧可、僧璨、道信、弘忍、法如を経て神秀に至る七代の伝燈系譜を確立し、これら七祖の略伝を記した最初のものである。

この『伝法宝紀』の成立とほとんど同じ頃、今一つの北宗禅の燈史である*『楞伽師資記』¹³⁾(713-716)が出現する。この書の撰者である浄覚は、法如や神秀と同じく東山法門の弘忍の十大弟子の一人である玄頤の弟子であり、師の玄頤の著わした『楞伽人法志』¹⁴⁾をふまえて、それを発展させたものである。この書の主張する伝燈系譜は、達摩から僧璨に至る楞伽宗の三祖に、道信、弘忍の東山法門の二祖を結合し、弘忍の後に神秀、玄頤、慧安の三人と、神秀の後に普寂、敬

賢、義福、恵福の四人の、北地両京を中心に活躍したいわゆる北宗禅の祖師達の系譜を結びつけ、その標題に示す如く、楞伽の伝燈を確立しようとしたものであるが、この楞伽の伝燈を一層強固にするために、四卷『楞伽経』の訳者である求那跋陀羅を達摩に先立つ第一祖に立て、そのために達摩が第二祖とされ、以下順次一代ずつ繰り下って、最後の普寂等四人が第八祖となる八代の伝燈系譜となっている。この求那跋陀羅を第一祖とする独特の伝燈系譜は、それから十数年後に同じ浄覚によって著わされた『般若心経』の注釈書である*『注般若波羅蜜多心経』¹⁵⁾の李知非による序文にも示されている。しかも李知非は、この系統を後世一般に呼ばれるような「北宗」ではなくて、「南宗」と呼んでいることや、後に伝衣から伝法偈へと発展するいわゆる「伝法の証」として、玄頤が浄覚に付法するのに、磨納の袈裟、瓶鉢、錫杖を伝授したことを記している点が注目される。

以上の北宗系の燈史が一致して主張したのは、弘忍の法が神秀に伝わった、すなわち神秀こそ達摩の正系であるということであったが、この立場を「師承是傍、法門是漸」として厳しく批判し、達摩の正系六祖は頓悟を主張する慧能であるとしたのが、慧能の門人の神会¹⁶⁾である。神会は、開元20年（732）正月15日、滑台の大雲寺に無遮大会を設け、北宗系の崇遠法師を相手に法論をいどみ、北宗攻撃の挙に出た。この法論の記録が、先にも述べた*『菩提達摩南宗定是非論』¹⁷⁾である。これを編纂したのは、神会の弟子とみられる独孤沛という人物であるが、独孤沛の序文には、達摩が一領の袈裟を伝えて伝法の証とし、その袈裟が達摩から慧可、僧璨、道信、弘忍を経て慧能に正伝され、慧能こそ達摩の正系第六祖であることを強調し、北宗系が第六祖としていた神秀を傍系として退けたのである。ただ神会が名指しで批難攻撃を加えるのは、神秀ではなくてその弟子の普寂であり、この普寂が妄りに「南宗」と称し、自ら「第七代」を称したとして批難するのは、神会自らが「菩提達摩南宗」の「第七代」をもって任じようとした強い執念によるものである。この神会の主張は、神会の語録を集めた*『神会語録』¹⁸⁾の内、特に日本の石井光雄氏旧蔵の*石井本『神会録』の末尾に付された『師資血脈伝』では、達摩から慧能に至る六代の祖師が、いずれも『金剛般若経』によって如来の知見を得たとして、先の北宗禅における『楞伽経』の伝燈の主張を超える新たな立場を強調しようとするものと相通するものであり、これによって慧能を正系第六祖とする南宗禅の基盤が確立されるに至ったのである。

神会は、達摩正系の証として「伝衣」という新たな手法を用いたが、この伝衣

説を巧みに利用して、自派の達摩正系を主張する更に別の一派が出現する。すなわち東山法門の弘忍門下から派生し、揚子江上流の四川省成都を中心に展開する智詵、処寂、無相、無住と次第する系譜を主張する浄衆宗、保唐宗と呼ばれる一派であり、この派で主張する伝燈系譜を伝える燈史が、*『歴代法宝記』¹⁹⁾(774)である。先に『菩提達摩南宗定是非論』が主張した伝衣が、慧能の処にあるとするのをふまえ、この伝衣を則天武后が召し上げて智詵に授けたとし、それが処寂を経て無相に授けられ、更に無住へと伝授されたとして、この伝衣を有する無住こそ達摩の正系であることを主張しようとしたのである。

この伝衣説による正系の主張も、『歴代法宝記』と恐らくその直後に成立したとみられる慧能の行実を述べた『曹溪大師伝』²⁰⁾(781)までであり、時代は更に新たな伝法の証を求めていくのであり、その要請に応じて出現したのが、*敦煌本『六祖壇経』²¹⁾(790頃)に始まる「伝法偈」である。『六祖壇経』では、達摩から慧能に至る東土六代の祖師の付法頌を示すのみであるが、釈尊以来の正法が、西天二十八祖東土六代と伝持されたことを、伝法偈の授受によって主張しようとする新たな燈史として『宝林伝』²²⁾(801)が出現すると、これが禅宗の正統説として確定し、以後それが*『聖胄集』²³⁾(899)、*『泉州千仏新著諸祖師頌』²⁴⁾、『祖堂集』²⁵⁾(952)、*『景德伝燈録』²⁶⁾(1004)、『伝法正宗記』²⁷⁾(1061)へと継承され、『祖堂集』以後、過去七仏・西天二十八祖・東土六代の伝燈説が確固不動のものとなり、今日の日本の禅宗にまで継承されているのである。

Ⅲ 初期の禅語録

禅宗の特色を示すスローガンとして、「不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏」というのがある。禅宗は教宗の如く特定の経典論書を拠り処とせず、文字による教の外に、仏心の師資相承をもってその根本とするといわれている。先にみた伝燈系譜を立てて達摩の正系を主張する燈史の成立も、こうした禅宗の特質を如実に示すものであるが、「不立文字」は、経典論書の文字に執らわれないということであって、必ずしも「不用文字」を意味しない。むしろ経典論書を自らの悟境の上から自由に使得するというのが、禅宗の経典観であるとみるのが正しい見方である。

中国禅宗の成立を、馬祖、石頭の頃とするのが、今日一般に認められている説であるが、この頃からいわゆるの禅宗語録が出現するのは、禅院の独立と、住持

が法堂に上り、現身仏として自らの悟境を自由に説示する上堂の法が行われるようになったからだ、と考えられる。現身仏であるからして、釈尊の説かれた經典に依拠する必要はない。仏説の権威は最早無用のものとされたのである。

ところが、今問題の敦煌禅籍としての「初期の禅語録」²⁸⁾は、こうしたいわゆるの禅宗語録とはかなり趣を異にしている。その第一の特色は、自由に自らの思想や禅風を説き示す点では後世のそれと異なるものではないが、そうした説示の最後に、經典の言葉を引用して自らの説示が仏説に反するものではないことの証としていることである。すなわちこのような經典の引用を経証というが、経証による裏付けを必要としたところに、仏説の権威を捨てきれない過渡的立場にあることが窺われるのである。

これと同じ発想は、敦煌禅籍の一部として挙げた初期の禅宗における偽經²⁹⁾の成立にみられる。『最妙勝定經』『法句經』『金剛三昧經』『禅門經』『法王經』等が出現するのは、仏説という権威を借りて、自らの思想や禅風を經典の形式をとって主張しようとするもので、これは先の初期の禅語録の成立と同時代に起った現象である。

第二の特色は、初期の禅語録の多くが、達摩論と呼ばれる範疇に属することである。達摩論というのは、達摩に仮託して自らの思想や禅風を説示するものであって、初期の禅語録の多くが、「菩提達摩」とか「達摩大師」とか「達摩和尚」等の名を冠した標題を持って伝承されている事実は、誠に顕著なものがある。これは、先にみた自らを達摩の正系として主張する伝燈系譜の出現と表裏をなすものであり、仏説の権威と同様、祖師の権威をも活用しようとした証拠である。後に臨済が、「逢仏殺仏、逢祖殺祖」といって、仏祖の権威を否定し、經典を「不浄を拭う胡紙」といって、仏説の権威を否定するのは、こうした初期の禅語録の過渡的立場を脱脚した、真の自由、自在の確立を意味し、それがインド的な教学的残滓を捨て切った中国人自身による禅宗の成立を意味した。敦煌の禅籍が、一部の燈史を除いて、馬祖以後のものがまったくその姿を消すのは、何か別に理由があるとしても、この中国禅宗の成立と奇妙に符合するのは、注目すべきことである。

第三の特色は、初期の禅語録が、いずれも問答体という共通の形式を持っていることである。それは、実際に行われた問答の記録というよりは、問答体という形式を借りて自らの思想や禅風を表現しようとする独特のものである。前述の如

く、馬祖以後の禅宗にあっては、上堂という公式の説法が中心となり、師家が学人に対して禅法を挙揚する形式が一般であるが、初期にあっては、未だそうした形式も整わず、自由な問答によって禅法が挙揚されており、それが初期の禅語録の形式として用いられたものと考えられる。その意味でも、初期の禅語録は、後の禅宗語録の成立する過渡的姿を示したものといえよう。

それでは、具体的に敦煌禅籍としての初期の禅語録には、いかなるものがあるかといえば、まず達摩の唯一の真説とされる「二入四行」を巻首に有する最古の禅宗語録とみられる*『二入四行論』³⁰⁾、『楞伽師資記』道信章に引用された道信の禅法を伝える長文の*『入道安心要方便法門』³¹⁾、その弟子弘忍が述べたとされる*『蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論』³²⁾、東山法門の綱要書とみられる2種の*『達摩禅師論』³³⁾、北宗の祖神秀の撰述という『破相論』の別名を持つ*『観心論』³⁴⁾、北宗禅の綱要書で、『大乘五方便』とも呼ばれる*『大乘無生方便門』³⁵⁾、南宗の祖慧能の説法集とされ、『南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜經 六祖惠能大師於韶州大梵寺說法壇經』という長い標題を有する*『六祖壇經』³⁶⁾、その弟子神会の*『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』³⁷⁾、一般に『神会語録』の名で呼ばれる*『南陽和尚問答雜徵義』³⁸⁾、南宗禅の綱要書である*『無心論』³⁹⁾、北宗、南宗に対する第三の宗派といわれる牛頭宗の祖法融のものであり、『観行法為有縁無名上士集』とか『入理縁門論』等の別名を有する*『絶観論』⁴⁰⁾、弘忍下に発展した念仏禅を主張する一派の作とみられる*『南天竺国菩提達摩禅師観門』⁴¹⁾、そして南宗の主張する頓悟を取り入れて、後期北宗禅で成立した慧光の*『大乘開心顯性頓悟真宗論』⁴²⁾と侯莫陳琰の*『頓悟真宗金剛般若修行達彼岸法門要決』⁴³⁾等を挙げる事が出来る。

従来の研究は、これらの初期禅宗語録の作者とその位置づけが中心となり、個々の語録の内容の検討は必ずしも十分ではなかった。今後に残された課題といえよう。

IV その他の敦煌禅籍

以上で(1)燈史類と(2)語録類についてその概要を述べたので、最後に(3)偈頌類について触れなければならないが、敦煌禅籍の中心は飽くまで前二者にあり、紙幅の関係もあるからして、これについては項目別にその題名を挙げるにとどめたい。

まず初期の禅僧の修道偈としては、亡名の*『亡名和尚絶学箴』、僧璨の*『信心銘』、一般に『證道歌』の名で呼ばれる玄覺の*『禅門秘要決』、神会の*『頓悟無生般若頌』、臥輪の*『臥輪禅師看心法』、靈祐の*『大滄警策』等⁴⁴⁾があり、任二北氏によって定格聯章と命名された、一定の章数によって増減することなく数首連繫して一篇をなす形式を持ったものに、*『南宗定邪正五更転』、*『大乘五更転』、*『無相五更転』、*『維摩五更転』、*『南宗讚』等からなる五更転類、*『禅門十二時』で代表される十二時類、*『行路難』や*『安心難』にみられる行路難等⁴⁵⁾がある。また先に挙げた禅宗独自の伝法偈もこの範疇に入れることが出来るよう。

その他その数は決して多くはないが、*『金剛五礼』や*『大通和上七礼文』の如き礼讚文、*『大通道和上塔文』や*『第七祖大照和尚寂滅日斎讚文』（擬）の如き塔文や斎讚文があり、また*『王梵志詩』の如き通俗詩や、*『揚州顓禅師遊山遇石室見一女人独机一床贈詩一首』、*『梁武帝問志公和尚如何修道』、*『稠禅師薬方療有漏』、*『大乘薬関』、*『稠禅師解虎讚』、*『先徳集於双峯山塔各談玄理』、*『讚禅門詩』、*『秀禅師勸善文』、*『傳大士頌金剛経』等の雑詩文等⁴⁶⁾の中に、明らかに禅僧の手になるものを挙げる事が出来る。これ等の敦煌禅籍の総合的研究こそ、今後の重要課題ということが出来るのである。

註

- 1) 敦煌県博物館が、自ら所蔵する敦煌文献78点の目録を、「敦煌県博物館蔵敦煌遺書目録」と題して発表したもの。
- 2) 向達氏の「西征小記」は、1950年7月発行の『国学季刊』第7巻第1期に収載され、それは1957年、新華書店発行の向達著『唐代長安与西域文明』に再録されている。
- 3) 楊曾文氏の報告は、中日仏教学術会議を共催した中外日報社より、1987年10月23日発行の『中外日報』23,706号に、麦谷邦夫氏の翻訳でその全文が掲載され、中国でも、『世界宗教研究』に発表された。
- 4) 任子宜氏旧蔵、すなわち現敦煌県博物館所蔵のテキストは、註1)の「敦煌県博物館蔵敦煌遺書目録」の番号077に、「南宗頓教最上大乘波若波羅蜜経」の標題で記載されたもので、93葉からなる梵爽式蝶装本であり、その内容は、(1)『菩提達摩南宗定是非論』（首部欠）、(2)『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』、(3)『南宗頓教最上大乘壇経』(4)『浄覺註金剛般若波羅蜜多心経』の4種と、その外に『南宗定邪正五更転』と『五言詩一首』からなる。
- 5) 梅村坦氏の「敦煌探険・研究史」は、1980年、大東出版社発行の榎一雄編『敦煌の自然と現状』〈講座敦煌1〉に収載されている。

- 6) 『敦煌遺書総目索引』には、(1)北京図書館蔵敦煌遺書簡目、(2)斯坦因劫経録、(3)伯希和劫経録と、(4)敦煌遺書散録として19種の目録を収載している。
- 7) 敦煌禅宗文献の分類については、1983年、大東出版社発行の田中良昭著『敦煌禅宗文献の研究』の序論の「二 敦煌禅宗文献—その研究の歴史と意義—」を参照。尚、1980年、大東出版社発行の篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』〈講座敦煌8〉は、その分類項目の順に編纂されている。
- 8) チベット語訳の禅籍については、註7)の篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』の「Ⅵ 中国禅とチベット仏教」を参照。
- 9) 道宣著『続高僧伝』30巻と賛寧著『宋高僧伝』30巻は、共に『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』)第50巻に収録されている。
- 10) 道原著『景德伝燈録』30巻は、『大正蔵』第51巻に収録されている。
- 11) 『唐中岳沙門釈法如禅師行状』の拓本は、1967年、法蔵館発行の柳田聖山著『初期禅宗史書の研究』の巻頭図版の一に、またその校注は、同書の附録「資料の校注」の〔資料一〕にある。
- 12) 杜朮の『伝法宝紀』については、1971年、筑摩書房発行の柳田聖山著『初期の禅史 I—楞伽師資記・伝法宝紀—』〈禅の語録2〉に、その解説、本文校定、訳註がある。尚、John R. McRae 氏の英訳については、註32)を参照。
- 13) 浄覚の『楞伽師資記』については、註12)の柳田聖山著『初期の禅史 I』に、その解説、本文校定、訳註がある。
- 14) 玄頤の『楞伽人法志』は現存しないが、その一部が註13)の浄覚の『楞伽師資記』弘忍章と神秀章に引用されており、内容の一部を窺うことが出来る。
- 15) 浄覚の『注般若波羅蜜多心経』については、註11)の柳田聖山著『初期禅宗史書の研究』の附録「資料の校注」の〔資料七〕を参照。
- 16) 神会の伝記については、多くの成果が公にされているが、その代表的なものとしては、1935年、商務印書館発行の胡適著『胡適論学近著』第1冊所収の胡適氏の「荷沢大師神会伝」、1958年11月発行の『中央研究院歴史語言研究所集刊』29所収の胡適氏の「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」の「四 校写後記」(共に1968年、胡適紀念館発行の『胡適校 敦煌唐写本 神会和尚遺集』、及び1975年、中文出版社発行の柳田聖山主編『胡適禅学案』に再録)、1939年、岩波書店発行の宇井伯寿著『禅宗史研究』の「第五 荷沢宗の盛衰」、1951年、*Journal Asiatique* 239巻1号所収の Jacques Gernet 氏の“Biographie du Maître Chen-Houei du Ho-tsö(668-760), Contribution à l'histoire de l'ecol du Dhyāna”, 1954年発行の『東洋史学論集』第2所収の山崎宏氏の「荷沢神会禅師考」(1967年、法蔵館発行の山崎宏著『隋唐仏教史研究』に再録)等があり、最近では、1984年2期の『世界宗教研究』に収載された温玉成氏の「記新出土的荷沢大師神会塔銘」がある。特にこの塔銘の出現は、神会の生卒年について、胡適氏が嘗て主

張した668-760年93歳説を自ら670-762年93歳説に改めたのを、更に684-758年75歳説に改める結果となった。

- 17) 『菩提達摩南宗定是非論』は、1930年、亜東図書館発行の胡適著『神会和尚遺集』において、P3047とP3488により初めてその内容が知られ、後に註16)の胡適氏の「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」において、新資料P2045を加えた新たな校定がなされ、両者共に註16)の括弧内の胡適著『胡適校 敦煌唐写本 神会和尚遺集』に再録された。尚第4のテキストである註4)の敦煌県博物館本は、首部を欠くも保存状態はよく、従来の不明箇所も補正も可能であり、その一日も早い公刊が待たれている。
- 18) 『神会語録』は、註17)の胡適著『神会和尚遺集』において、P3047により初めてその内容が知られ、別に1932年、石井光雄氏が、自ら所蔵する石井本を『敦煌出土神会録』と題してその影印を刊行し、その校定本は、1934年、森江書店より鈴木大拙・公田連太郎両氏により、『燉煌出土荷沢神会禅師語録』と題し、敦煌本と興聖寺本の『六祖壇経』と同帙にて出版された。1949年、Jacques Gernet氏は、胡適氏の『神会和尚遺集』のすべてを仏訳し、*Entretiens du Maître de Dhyāna Chen-Houei du Ho-tsö(668-760)*と題して、ハノイのフランス極東学院より、その出版物第31巻、すなわち *Publications de l'Ecole Française d'Extrême-Orient vol. XXXI*として刊行した。1960年、胡適氏は、入矢義高氏の報告により、新たに『問答雜微義』と題する第3のテキストであるS6557の存在を知り、『中央研究院歴史語言研究所集刊』外編第四種に、「神会和尚語録的第三個敦煌写本：南陽和尚問答雜微義：劉澄集」と題して3種のテキストの比較検討をされ、また同様に入矢氏の報告を受けた Paul Demiéville氏は、1961年、『塚本博士頌寿記念 佛教史学論集』に、“Deux documents de Touen-houang sur le Dhyāna Chinois”と題する論文を発表し、S6557の『問答雜微義』とS2672の『頓悟大乘正理決』の2種の禅宗文献に関する研究を公にされている。また1968年、岩波書店発行の鈴木大拙著『鈴木大拙全集』第3巻にも、石井本と『神会和尚遺集』所収の胡適校訂本が、上下に对照して示されている。
- 19) 『歴代法宝記』については、1976年、筑摩書房発行の柳田聖山著『初期の禅史Ⅱ—歴代法宝記—』〈禅の語録3〉に、その解説、本文校定、訳注がある。
- 20) 『曹溪大師伝』については、1978年、大修館書店発行の駒沢大学禅宗史研究会編『慧能研究』に、その解説、比叡山本の影印、本文校訂、訳注がある。
- 21) 敦煌本『六祖壇経』については、1930年、岩波書店発行の矢吹慶輝編『鳴沙餘韻』にS5475の影印が示され、それより先の1928年、矢吹氏の写真提供により『大正蔵』第48巻に収録され、註18)の鈴木大拙・公田連太郎両氏による『燉煌出土六祖壇経』でその校訂がなされた。1941年、岩波書店発行の宇井伯寿著『第二禅宗史研究』の「第一 壇経考」では、その本文研究が、また1974年、中央公論社発行の柳田聖山著『禅語録』〈世界の名著 続3〉では、その訳注がなされている。また1959年には、Wing-tsit

Chan 氏の本文校訂と英訳が、*The Platform Scripture, The basic Classics of Zen Buddhism* と題して、ニューヨークのセント・ジョンズ大学出版局から刊行され、また1967年には、Philip B. Yampolsky 氏の本文校定と英訳及び註が、*The Platform Sutra of the Sixth Patriarch* と題して、ニューヨーク及びロンドンのコロンビア大学出版局から出版されている。更に今一つの敦煌本である註4)の敦煌県博物館本は、悪本とされるS5475の校訂に有益とみられる。

- 22) 『宝林伝』10巻については、1975年、中文出版社発行の柳田聖山主編『宋藏遺珍 宝林伝・伝燈玉英集』に、1932年、常盤大定氏が京都青蓮院で発見した巻6と、翌1933年、山西省趙城県広勝寺にて発見された『金刻大藏経』所収の巻1～5と巻8の都合7巻を収録する。尚その本文校訂と訳註は、1980年以降、駒沢大学禅宗史研究会により実施され、既に巻1～5の5冊が刊行され、それ以後については現在継続中である。
- 23) 『聖胄集』5巻については、1958年10月発行の『仏教史学』第7巻第3号所収の柳田聖山氏の「玄門『聖胄集』について—スタイン蒐集燉煌写本第4478号の紹介—」でS4478の本文校定と解説がなされ、1983年、註7)の田中良昭著『敦煌禅宗文献の研究』では、本書の巻1部分が密教的に改変され、密教文献『金剛峻経金剛頂一切如来深妙秘密金剛界大三昧耶修行四十二種壇法経作用威儀法則、大毗盧遮那金剛心地法門秘法戒壇法儀則』の「付法蔵品部第三十五」に依用された問題が詳述されている。
- 24) 『泉州千仏新著諸祖師頌』は、矢吹慶輝氏により、1930年、『鳴沙餘韻』に影印が、1933年、『鳴沙餘韻解説』に解説が示され、1932年、『大正蔵』第85巻に収録された。著者の泉州千仏は、註25)の『祖堂集』の編者静・筠二禅徳の師に当り、『祖堂集』の序者でもある。本書の頌は、『祖堂集』の各祖師伝の末尾に、「浄修禅師讚曰」として付されている。
- 25) 『祖堂集』20巻は、高麗版『大藏経』の印行に際し、その附録として彫造されたもので、その版木は、伽耶山海印寺に韓国の国宝として保存されている。海印寺住持の林幻鏡氏の手沢本である花園大学図書館蔵本による影印が、1972年、中文出版社から〈禅学叢書之四〉として出版され、1974年、註21)の柳田聖山著『禅語録』に抄訳と註が示され、同じ柳田聖山氏による索引が、1980～1984年、『祖堂集索引』上中下の三冊として出版されている。
- 26) 『景德伝燈録』30巻は、註10)の如く『大正蔵』第51巻に収録されているが、その他に、1976年、中文出版社より〈禅学叢書之六〉として、柳田聖山氏の主編により、四部叢刊本の宋版と萬曆42年(1614)仏明山雙溪寺開板の高麗本が、『宋版・高麗本 景德伝燈録』と題して出版されている。またレニングラードのオルデンブルク将来の敦煌文献中にも、M897とM2686の2種の残巻の存在が知られている。
- 27) 『伝法正宗記』30巻は、『大正蔵』第51巻に収録されている。
- 28) 初期の禅語録については、極めて多くの成果が公にされているが、それらを総合的に

- 解説したものに、1971年、1974年、1976年各3月発行の『駒沢大学仏教学部研究紀要』第29号、第32号、第34号所収の田中良昭の「敦煌禅宗資料分類目録初稿」Ⅱ禅法・修道論〔1〕～〔3〕、1974年、筑摩書房発行の『禅家語録Ⅱ』〈世界古典文学全集36B〉末尾の柳田聖山氏による「禅籍解題」、1985年3月、京都大学人文科学研究所発行の『東方学報』第57冊所収の柳田聖山氏の「語録の歴史—禅文献の成立史的研究—」等がある。
- 29) 初期禅宗で成立した偽経については、それを総合的に取扱ったものに、1980年、註7)の篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』に収載された岡部和雄氏の「V 禅僧の注抄と疑偽経典」がある。
- 30) 『二入四行論』については、1969年、筑摩書房発行の柳田聖山著『達摩の語録—二入四行論—』〈禅の語録1〉に、その解説、本文校定、訳註がある。
- 31) 道信の『入道安心要方便法門』については、それが浄覚の『楞伽師資記』道信章に引用されているところから、註13)の柳田聖山著『初期の禅史Ⅰ—楞伽師資記・伝法宝記—』を参照。尚1983年、パークレーのアジア人文出版局発行の Whalen Lai & Lewis R. Lancaster 編の *Early Ch'an in China and Tibet* には、David W. Chappell 氏の “The Teachings of the Fourth Ch'an Patriarch Tao-hsin(580-651)” と題する本書の解説、英訳及び註がある。
- 32) 弘忍の『修心要論』については、1951年、岩波書店発行の鈴木大拙著『禅思想史研究第二』に解説と本文校訂があり、1986年、ホノルルのハワイ大学出版局発行の John R. McRae 著 *The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism* に、その解説、本文校訂、英訳及び註がある。
- 33) 『達摩禅師論』については、内容の異なる橋本凝胤氏旧蔵本とP2039の2種があり、前者については、1957年、彰国社発行の関口真大著『達摩大師の研究』に影印、本文校訂、解説があり、後者は、1983年、註7)の田中良昭著『敦煌禅宗文献の研究』に本文校訂と解説がある。
- 34) 神秀の『観心論』については、1936年、安宅仏教文庫出版の鈴木貞太郎（大拙）著『校刊少室逸書及解説』の附録『達摩の禅法と思想及其他』に五本対校が示され、それが1971年、岩波書店発行の『鈴木大拙全集』別巻1に再録されている。また1986年3月発行の『駒沢大学仏教学部研究紀要』第44号所収の田中良昭の「『菩薩惣持法』と『観心論』」(二)に、本文校定と訓註がある。
- 35) 『大乘無生方便門』については、1939年、註16)の宇井伯寿著『禅宗史研究』の「第八 北宗残簡」、及び1968年、註18)の鈴木大拙著『鈴木大拙全集』第三巻の「第二篇 研究文献」に、解説と本文校定がある。
- 36) 『六祖壇経』は、註21)の敦煌本を最古のテキストとして、西夏語訳をはじめ多くの異本があり、それらを影印で総集したものに、1976年、中文出版社発行の柳田聖山主編『六祖壇経諸本集成』〈禅学叢書之七〉、台湾における研究成果を総集したものに、1976

年、張曼濤編『六祖壇經研究論集』〈現代仏教学術叢刊1〉、5種の異本対照と解説をしたものに、1978年、註20)の駒沢大学禅宗史研究会編『慧能研究』がある。

- 37) 『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』については、1935年の『少室逸書』、1936年の『校刊少室逸書及解説』にて、鈴木大拙氏による影印と、本文校訂及び解説がなされ、1952年、その英訳が、W. Liebenthal氏により、*Asian Major new series Vol. 3 no.2*に、“The Sermon of Shên-hui”と題して発表された。また1958年、註16)の胡適氏の「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」に、P2045の本文校定と解説がなされ、これが1968年、註16)の『胡適校 敦煌唐写本 神会和尚遺集』に再録された。また同年、註35)の鈴木大拙著『鈴木大拙全集』第三巻にも本文校定がなされ、新出の敦煌県博物館本については、註4)の記載の通りである。
- 38) 『南陽和尚問答雜徵義』については、註18)を参照。
- 39) 『無心論』については、唯一のテキストであるS5619が、1927年、『大正蔵』第85巻に収録され、1951年、註32)の鈴木大拙著『禅思想史研究第二』に、本文校訂と解説が示され、更に1974年、註21)の柳田聖山著『禅語録』に、その訳注がなされている。
- 40) 『絶観論』については、1950年、弘文堂発行の鈴木大拙編・古田紹欽校の『絶観論』に、石井光雄氏旧蔵本の影印、及びそれと北京本閏84との対照と解説が示され、1951年、註32)の鈴木大拙著『禅思想史研究第二』に本文校定がなされ、その後ペリオ本4種を加えた6本すべてを対校したものに、1970年3月、『禅学研究』第58号所収の柳田聖山氏の「絶観論の本文研究」がある。1976年、禅文化研究所発行の常盤義伸・柳田聖山編『絶観論』は、すべてのテキストの影印、本文校定、和訳、英訳を含んでいる。尚菩提達摩の名を冠した本書の撰者を牛頭法融とするのを初め、一般に達摩論といわれる初期の禅語録の成立問題を総合的に検討したものに、1957年、註33)の関口真大著『達摩大師の研究』がある。
- 41) 『南天竺国菩提達摩禅師観門』については、1927年、S2583が『大正蔵』第85巻に収録され、1951年、註32)の鈴木大拙著『禅思想史研究第二』に、本文校定と解説が示され、その後に出現したテキストを総合し、本文校定と解説をしたものに、1983年、註7)の田中良昭著『敦煌禅宗文献の研究』がある。
- 42) 『大乘開心顯性頓悟真宗論』については、1927年、P2162が『大正蔵』第85巻に収録され、1934年、金九経氏により『蕙園叢書』にも収載され、1968年、註35)の鈴木大拙著『鈴木大拙全集』第三巻に本文校定が示された。1964年、饒宗頤氏の発見紹介したS4286をも含め、新たに解説と本文校定、訳注をしたものに、1989年2月、『松ヶ岡文庫研究年報』第3号所収の田中良昭の「校注和訳『大乘開心顯性頓悟真宗論』」がある。
- 43) 『頓悟真宗金剛般若修行達彼岸法門要決』は、註42)の『頓悟真宗論』と類似した後期北宗禅の綱要書であり、不完全な漢文テキストに対し、完全なチベット訳が存在し、1976年8月、『禅文化研究所紀要』8所収の上山大峻氏の「チベット訳『頓悟真宗要決』

の研究」において、チベット訳のローマナイズによる校定、その和訳と註、2種の漢文テキストの校定とその対照が示されている。

- 44) 初期禅宗の修道偈については、1930年、註17)の胡適著『神会和尚遺集』の附録、1951年、註32)の鈴木大拙著『禅思想史研究第二』、1983年、註7)の田中良昭著『敦煌禅宗文献の研究』の「第三章 銘・箴・讚・偈類」、1985年、山喜房仏書林発行の鈴木哲雄著『唐五代禅宗史』の後篇「第三章 機と偈頌」等があり、それらを総合的に述べたものに、1980年、註7)の篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』の「Ⅳ 禅僧の偈頌」に、田中良昭の「一 修道偈Ⅰ」がある。
- 45) 定格聯章の歌曲については、1961年、註18)の『塚本博士頌寿記念 佛教史学論集』所収の入矢義高氏の「徴心行路難—定格聯章の歌曲について—」や、1971年、大蔵出版発行の金岡照光著『敦煌の文学』の「Ⅱ 敦煌文学のさまざま」等があり、それらを総合したものに、1980年、註7)の篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』の「Ⅳ 禅僧の偈頌」に、川崎ミチコの「二 修道偈Ⅱ—定格聯章—」がある。
- 46) 禅僧による讚文・塔文・通俗詩・雑詩文等を総合的に述べたものに、1971年、註45)の金岡照光著『敦煌の文学』、1980年、註7)の篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禅』の「Ⅳ 禅僧の偈頌」に、川崎ミチコによる「四 礼讚文・塔文」と「五 通俗詩類・雑詩文類」がある。